

# 21世紀の仏教 と私の役割

岩 波 弘 道

駒沢大学仏教学部卒業  
曹洞宗教化研修生

二五〇〇年前、釈尊によってインドに誕生した仏教が、中国を経て日本に伝えられ今日に至っていることは警嘆に価することです。なぜならこの間に、兵乱や天災地変などが数え切れな

いほど発生しています。この間にあって、財宝以上に、これを珍重し護持して来た先人の並々ならぬ努力があったからこそ、今私達は仏の教に相値うことができるのだと思います。私は「修証義」第五章の「今の見仏聞法は、仏祖面々の行持より来れる慈恩なり、仏祖若し単伝せずば、如何にしてか今日に至らん、一句の恩尚報謝すべし、一法の恩尚報謝すべし、いわんや正法眼蔵無上大法の大恩、これを報謝せざらんや」の一節を読む時、いつもおもいを新にするものです。

さて、人間はいろくくの面で有限ですが、その有限性が強く意識されて、大きな苦悩の原因ともなっており、更にそれが宗教的要求の源泉となっているものと思います。つまり生命の有

限性とか、善を行なう力の有限性で、前者は、無常觀を、後者は、罪惡觀を呼びおこし、そこから二つの代表的な型の宗教、すなわち無常觀からは、解脱教、罪惡觀からは、救済教が生れるといわれています。そして解脱教の代表は仏教であり、救済教の代表は、キリスト教といわれ、仏教内に限っていえば解脱教の代表は禪、救済教の代表は念仏ということができましょう。釈尊はじめ、祖師方の伝記をひもとくと「修証義」の冒頭に「生を明らめ死を明らむるは仏家一大事の因縁なり」とあるように、その多くが無常觀から出発しています。

生來聰明にして内向的な太子シツダルタに、深く人生を考えさせまいとして、父王スツドーダナはいろいろと心をくだかれた。シツダルタの心をなるべく外に向けさせようとして試みたはずの四門出遊が、逆にシツダルタの眼を人生の四苦に見開かせ、出家の決意を固めさせるこ

とになったのは、父王にとつてまこと皮肉な結果でした。それにしても生老病死の四苦を、はじめて目撃した太子ゴータマの驚きと不安はいかばかりだったでしょう。

この四門出遊がもとで太子シツダルタは最愛の妻子を捨て、一介の乞食沙門として出家するのですが、考えてみますと、太子が出家された当初には、一切衆生を救うというまでの心の動きはなかったのではないのでしょうか。

ただ、自らの解脱を求めての、真にせつばつまつての出家ではなかったかと思えます。

だからといって、太子の出家が決して低いレベルの動機からであつたとはいえません。「維摩經」の「衆生病むを以つての故に、われ病む」の有名な一語が教えるように、自己の苦惱は即ち一切衆生の苦惱であります。生老病死はこの互に生を受けたもの、等しく直面する重大問題です。したがって「生を明らめ死を明らむるは、

仏家一大事の因縁」なのです。

ところで今日、仏教に対する一般の見方は、一口に葬式仏教といわれるように、葬儀や法事だけが仏教であり、お寺は死者だけを相手にしていると考えられ勝ちです。現に私自身、寺院に生まれ育って仏教的雰囲気慣れていたため改めて「仏教とは何か」と問い直すことなく過ぎてきました。もとより私は葬儀や法事を軽視するものではありません。今日的仏教儀礼の大切なことは良くわかるつもりですがそれだけでは一面的な見方といわざるを得ません。同時に或はそれ以上に仏教本来の姿に迫る努力が必要だと思ふのです。

現在アメリカの宗門寺院の在り方は大きく二分されると聞いております。一つは日本からの移民に伴なって、移民の方々が護持してきた寺院、これは日本寺院の海外出張所といったものです。日本移民がまだアメリカ社会にとけこめ

ないころ、彼等のサロンの役割を果たしたもので、多分に日本寺院の色彩が濃厚であると聞きます。もう一つは、直接禪に結びついた日系以外の米国人によって護持されている寺院、ここでは中国の叢林を思わせるような共同生活によって、僧堂の行持を如法に行持していると聞きます。そして既に両本山に拝登して瑞世の式を了えている者もあり、今や禪は、アメリカ人自身によって語られ、導かれいよゝ定着の時代を迎えようとしているといえます。

仏教がアメリカという風土に根づくという歴史的なといっても過言ではない時に、私はその清新にして活性化されたアメリカにおける仏教に学びたい強い欲求を覚えます。彼等と起居を共にし共に悩み精進することは大きな意義のあることと信じます。

私はこの度自分の僧侶としての覚悟を再確認させて頂いた思いです。



今既に心の時代といわれ、二十一世紀は心への志向が更に強化される時代であろうといわれます。目前に迫った二十一世紀にどう対処するか、余りに遠大なテーマですが仏教が人々とってより身近かなものとなり、生活に生かされる、そうした形になるために、いさゝかでも私のアメリカでの体験が生かされれば幸だと考えます。

## 未来社会の 仏教と私

浦田 智司

千葉商科大学商経学部商学科卒、  
仏教 大学文学部仏教学科卒、日本  
大学歯学部附属歯科技工専門学校卒

政治的には東西といい、経済的には南北などといわれるように、世界の国々は、大小・強弱・貧富・体制等、それぞれ異なった状態のもとにある。そして自然環境はもとより、社会・経済・文化などの面で困難な条件できびしい生活を強いられる国も少なくない。

これに反して日本は、経済大国として物質的

にはきわめて恵まれた豊かな状態にある。これは、戦後、有利に展開した国際情勢のもと、日本人の努力勤勉によつてもたらされたものではあるが、物質的繁栄のみを追求した結果、今となつて心の貧しさを思い知らされる羽目に陥入つてゐる。ここから眞の幸福とは何か、人間の生き甲斐とは何かということが自らに問われることとなり、宗教、なかなしく仏教に対する関心が高まつてゐる。

また、日本の平均寿命は急速に伸びており、いまや高齢化社会に突入しはじめてゐる。間もなく日本社会は、老人人口と、それを扶養する人口とのアンバランスの問題が生じてくるであらう。が、今日の日本人の心の程度をもつてしては、果して高齢化社会を支え得るであらうか。他を省みるゆとりのない、自意識過剰の若者もやがては老人になる。ここに必要なのは老若立場を換えて人間の幸福を考えてみる柔軟性で

ある。他を思う心、利他をさきとする心がなくてどうして潤いのある未来社会を建設し得るであらう。今こそ精神的世界の豊かさを志向する社会・人間の心の豊かさを求めてゆく社会の建設に大きく眼を見開くべきときである。

さいわいにして日本は仏教国であるが、現代日本の若者の眼に、仏教は果してどのよう映じているであらう。彼らが連想するものは、恐らくは「葬式」であり「法事」であり、または「迷信」「非科学的なもの」であらう。

しかし眞の仏教は、本来きわめて科学的・革新的なものである。その意味においては、西欧の先進的な若者たちが持つてゐる仏教のイメージが、本来的な仏教のすがたに近いのではなからうか。近年、禪仏教が西欧の若者に求められてゐるのもそこに一つの原因があるのではなからうか。

私ども日本人は、東洋の文化遺産を軽視し、

西欧追隨型の文化に押し過ぎているのではなからうか。そこで、東西文化の融合を目指した仏教の可能性を開拓することは、次代を担う私たちに課せられた重要な課題である。

いま、諸外国の精神的基盤に溶け込み、異文化に接して、日本仏教を外から見直すことは、これまでに見えなかった仏教の新しい側面を知ろうえにきわめて有効なことではなからうか。

私たちは現代社会においては、学歴や勤務先といった鎧をまとして生きている。しかし海外に出れば、自分は自分でしかなくなる。そして発想や価値観を異にする人たちと出会うことにより、日本では望み得ない貴重な経験を積み重ねることができるとであろう。

日本民族学の父・柳田国男先生は、伊良湖岬に流れついた椰子の実を見て、遙かな熱帯国と日本との深い関係に気付かれたという。その意味で、タイ国と日本の文化は黒潮によって深く

かわりあつてきたといえるであろう。また、『日本書紀』にみる「吐火羅」との交流や朱印貿易における経済、文化などの日本との結びつきなどもある。しかし、これからは必ずしもタイ国と日本に望ましい形で発展してきたとはいえない。

今日、日本人のタイ国に対する歴史や文化に対する知識はきわめて表面的なものにとどまっていると思われる。おそらく私も、今回の応募を知らなければ、タイ国のことをどれだけ知ろうとしていたであろう。

一冊の本が人の岐路を決定づけることがある。必然や偶然といろいろな状況が考えられる。さまざまな機会を自己啓発と結び付け、そして経験の中から得るものを大切に心の糧として成長したい。

グラビアで見たタイの人びとの瞳の輝きに、飽食の日本で私どもが忘れかけている心の清浄

を感じ、欲望と執着にふりまわされている私の心の穢れを洗い清めてくれるような気がして、私は仏教国タイに強い憧れを抱き、この応募を契機に、タイ国文化、別して仏教を謙虚に学び、今後の日本国との仏教交流に微力を捧げたいと思う。



## 21世紀の仏教 と私の役割

島崎 義孝

花園大学文学部社会福祉学科卒、  
東北大学文学部社会学科博士課程  
卒、花園大学文学部社会福祉学科  
非常勤講師

〈仏教東漸〉ということがいわれてほぼ一世紀になる。今日ではそれぞれの社会ですでに一定の価値を認められ、むしろ仏教に対する期待はいよいよ高まっているかにもえる。だが、こうした事態はいつたい何に起因するのであろうか。

仏教に対する態度はヨーロッパとアメリカと

ではいくぶん異なるように思われるが、ここではないわゆる近代社会の典型と見做されているアメリカのそれについて若干述べてみたい。

一九六〇年代は知られているように、アメリカで様々な混乱が頻発した時代であった。従来諸価値、たとえば政治・経済・教育・家族あるいは教会の正統性までもが批判の対象にされたといわれている。それはひとくちにいえば、伝統的なアメリカ社会の存立そのものが疑問に付されたことを示しているが、とりわけ若い世代によって異議申したてが行われたことは注目に注する。

周知のごとくアメリカは二世紀余り以前、自由、平等あるいは成功、富といった近代社会がめざす諸価値をもつとも実現しやすい国家として出発した。そのばあい相反する二つの観念が混在していたといえる。ひとつは植民地として出発したアメリカが、旧大陸に対する対抗理

念としてもっていたヘニユー・エルサレム」という宗教的観念である。それは絶対主義の抑圧と紐帯を免れて、自己の全人的な解放を新天地に求める運動として現れた。少なくとも政治的には、国家としての規範的統一を保持していくうえで、聖書のイメージを中核とする普遍的な神の象徴性は大きな力を発揮してきたし、社会秩序一般もある程度このような観念とパラレルな関係を保ちつつ発展してきたといえる。それに対してもうひとつは、ヘアメリカン・ドリム」ということばによって示されるように、専ら社会的成功と富裕を目標とするきわめて現実的な欲望の追求を公然と行う風潮である。アメリカ史はこの二つの観念の相克によった貫かれてきたと考えられているが、事実は後者が前者を圧倒するほとんど一方的な展開をみせた。たとえば建国の理念としての自由や平等は、この社会が世俗化の過程を加速度的にたどるに



したがって、解釈に大きな変容をきたした。もとも他者を視野に入れて語られてきた自由や平等が、自己の利益を優先させる意味の方に重点を移動させたのである。

〈近代社会〉を特徴づけるいくつかのターム、官僚制、機械化、合理性、巨大化、匿名化などからわれわれが受けるのはいったい何であらうか。ふつう社会で発展とか進歩、成功というばあい、その現実が示す両価性を不問にしがちである。さしあたって都合のいい方をわれわれは選択する。しかし、負の部分がよいよ目をおおうようになってはじめてあわて出すのである。しかもそれはわれわれが考える以上に深刻な事態に立ち至っているかもしれない。たとえば公害や悪性の政治闘争などにみられるように、われわれの存在そのものにかかわる生態学体系的破壊、自己を他者を結ぶ感受性豊かな人格の内面的生活の荒廃などを生じさせることがある。

それは自然からの人間の疎外、人間からの人間の疎外としてたち現われる。六〇年代に沸騰した混乱や運動を評価する視点は様々であるが、それは近代社会の先頭を走るランナーとしてのアメリカが他の諸社会に先がけて、早晩そうした社会も必ず遭遇するであろう事態をもっともはやく体験したとはいえないだろうか。アメリカはいろいろな意味で、近代諸社会の帰着すべき状態を示すひとつの実験台としての役割を担っていることはまちがいない。

アメリカについて述べるまでもなく、民主的過程に対応できない人間に権力が委ねられ、家族や隣人関係が稀薄化し、道徳倫理が浸食され、かつまた良き伝統が発展的に継承されがたい社会、そのいくぶんかをわれわれはすでに体験している。しかも今日の社会は合理性や機能性ばかりではなく、快適性までも獲得の対象としているけれども、それらは決して確固とした基盤

があつてもたらされるわけではなく、むしろわれわれが何らかのみかえりを提供することによつて、かろうじて維持されているにすぎない。くりかえして言えば通常われわれは右のような現実を知らないか、故意に見るのを避けているのだ。だが、合理性や機能性の増大はがんらい人間に耐えがたい性格のものであるにちがいない。だいいち人間そのものが不合理な存在であり、われわれは機能性や論理性とは根本的に相入れない錯綜した世界を生きているのである。合理性や機能性がめざすものは不分明な部分を削除し、目標にむかつて構成要素を組織的に配列する点にある。したがつてそこでは、過性の快適さや満足は得られたとしても、全人的な幸福感を得られない。象徴的な言い方をするならば、精神的身体（どうじに身体的精神）であるべき人間存在が、身体と精神とに分裂し、それぞれ部分的に環境への適応を余儀なくされてい

るのである。アメリカにみられたいわゆるネオ・オリエンタリズムは、一面においてはそうした不安感を克服し、精神と身体との一体化をとり戻すことにあつたといえるのではあるまいか。ネオ・オリエンタリズムは多様であり、それに対する批判もないではない。曰く、道徳廃棄的、無政府主義的傾向、シニカルな私人主義、排他的、内向的集団。しかしながらこれらいわば反社会的な志向を示す運動とはやや趣を異にして、日常生活の身近かな事柄から見直していくこうとする動きもある。自由討議運動から共同生活体にとりたるまでの市民運動、公民権運動などがそれである。そして仏教に対するアプローチの仕方も右のような状況を反映して一様ではない。瞑想によつて非日常的な靈力を得る、芸術活動のひとつの起爆剤として仏道修行を行う、キリスト教とは異質の世界観・人生観を得るといったように各人各様の関心と期待が寄せられ

ているのである、彼らの仏教に対するかかわりのなかには、必ずして仏教の精神に合致しないものもあるといわれているが、それはそれとしてアメリカ社会が宗教的には主としてキリスト教によって色どられていることに注意すれば、仏教が何ほどか対抗的な意味あいを取り組まれていることが知られよう。つまり、キリスト教およびそれに影響された政治・経済思想が結果した社会の、ある種の閉塞状況を突破する方法が仏教に求められているとはいえないだろうか。仏教は人間観においてキリスト教とは対照的な展開を示しているが、それは救済方法にも如実に反映されている。具体的な実践方法としての坐禅・瞑想はその典型的な現れであろう。言うまでもなく仏教の教える瞑想は無上正覚に至ることを目指しているが、意味するものは自己が他者の介在を許さず、自己に直接出会うことにある。キリスト教の世界観が自然科学上の様々

な発見によって切り崩され、科学主義のもとに近代的理性をそなえた人間にとつて、非合理的なるがゆえに我信ずといった心情がしだいに不可能になりつつある今日、仏教のもつとも根本的な実践方法はそうした時代の傾向に適合的な内容をもっているといえよう。静寂のうらに自己を探究する行為じたいに、個体としての人間が普遍的なものに直接通じていることをわれわれは知るのであるが、それは同時に人間存在の虚構性に気づくことでもある。個体や靈魂の恒常性については無我論が、また、人間が神の創造になるものでないことは縁起論が、それぞれ仏教の中核的な教説として初期から説かれている。そしてこのような認識論的な立場に立つならば、現代社会のひとつの特質としてしばしば指摘される人間相互の疎外的状況を回復するための端緒を仏教に見出すことも不可能ではないであろう。

以上のように見てくると仏教が負うべき課題は大きく、かつ重いことがわかる。にもかかわらず、今日の日本の仏教が大勢において祖先祭祀を中心とする儀礼主義に陥っており、そこから一步も抜け出ようとしなのはいったいどうしたことであろうか。生の人間の切実な要請に答えることが仏教の根本的な成立契機であったし、今後もそうあり続けなければならない。釈尊においては、日常生活に生かされない知識や思想は徹底して退けられてきたはずである。釈尊の教えに接しているわれわれ自身が、その精神をほんとうに理解し、実践しているのかどうか。仏教者の日常の行履を視野の外におき、現実のわが国の仏教事情を閑卵して、いたずらに「仏教東漸」を云々するのは考え直さなければならぬであろう。仏教とはいったい何であるかを再確認する意味において、彼地で行われている清新な仏教受入の態度に見るべき何かがある

るとすれば、それこそわれわれがもう一度学ぶべき点であるといえる。

汝自身を知れ、とは千古不易の箴言だが、このことが今ほど切実な意味をおびている時代はおそらくあるまい。というのも、今日のわれわれをとりまく生活のどの局面においても、疑似環境の環境化とでもいうべき事態がいよいよ進行しており、自己の所在を見出し難い状況が急速に顕在化しつつあるからである。かつてD・フィリップスは（禅）仏教が志向する人間観を、いたるところに中心があつて周辺のない円と述べたことがあるが、右のような状況にあつて、彼のいうような自己認識がいっそう不可欠であることは言をまたない。そして、われわれの立場からするならば、坐禅・瞑想という心身を具したきわめて実践的な行為によつてこそ、はじめてそうした認識への可能性が開かれるのであり、したがつて自らも行じ、他者にも普く

坐禅瞑想を勧める意義が在するのではあるまいかといえるのである。

# 良寛さんにて 魅せられて

(愛心と愛話の花籠に)  
(盛られた美しい心)

李 幼 麟

復旦大学常勤講師、上海科学技術  
大学常勤講師

あと十三年、人類は二十一世紀を迎える。人間はさまざままで、思想はまちまちであるが、いかにわれわれを二十一世紀へ導き、二十一世紀を歩んでいくか、時々考えざるを得ない。一年間、指導教授飯田先生のご指導で、様々

な方面から良寛さんに触れてきた。その結果、良寛さんの多方面にわたるその才能に頭をさげる。私はもつと良寛さんを研究し、中国の国民にいまだにまだ知られていない良寛さんを紹介しようとして決心した。

国が違い、風俗習慣が違っても、良寛さんの思想は決して日本のものだけでなく、中国のものも含まれている。というのは、良寛さんの思想ははるかに日本の国境を越え、東洋的である。良寛さんの徳望は、良寛さんが示寂して百五十年たったが、ますます高揚され、日本はおろか諸外国の人々にも敬仰されてきた。

一年前まで私は良寛さんが只管打坐を旨として生きぬいた禪者であったことすら知らない。まったく良寛さんの真実、真面目を知らないで、多くの人々とあたかも群盲が象の一部分を撫でて、あれこれと象の全体を論じ合うようなものがあった。

良寛さんは自分の実態をあらわにしないように、愚のごとく、魯のごとく生きていた。後世の人たちが如何に自分を解しようとも、それは人にまかせ、その辞世にもあるように「裏を見せ、表を見せて散る紅葉」で、どう自分を見てくれようが、自分の真面目には変りがないと平然として暮らされた。良寛さんは、故意にその真面目をぼかしていたわけではなかった。堂々とした長篇の漢詩、しかもその詩の体は、中国、日本文学史上いまだかつてなかった新しい形態で、自分の真意を切々と語り、そして、訴えている。

飯田利行先生の御著書「良寛詩集訳」「良寛 鬮詩集訳」「大愚良寛の風光」などに良寛さんに関する、いろいろな問題と謎を解明してくださっている。

### 看莊子圖贊骸骨

莊子の図を看て骸骨に贊す

垂天雲鵬出

九萬里圖南

縮翼鬮體筆

掛在半間菴

註 垂天の雲に 鵬出づ

九万里 南せんことを図り

翼を鬮體の筆に縮め

掛けて半間の菴にあり

この詩は、その題のしめすように、莊子逍遙篇の内容に対して、良寛さんの批評を述べたものである。良寛さんの心情というものをよく描いたものであるということができよう。

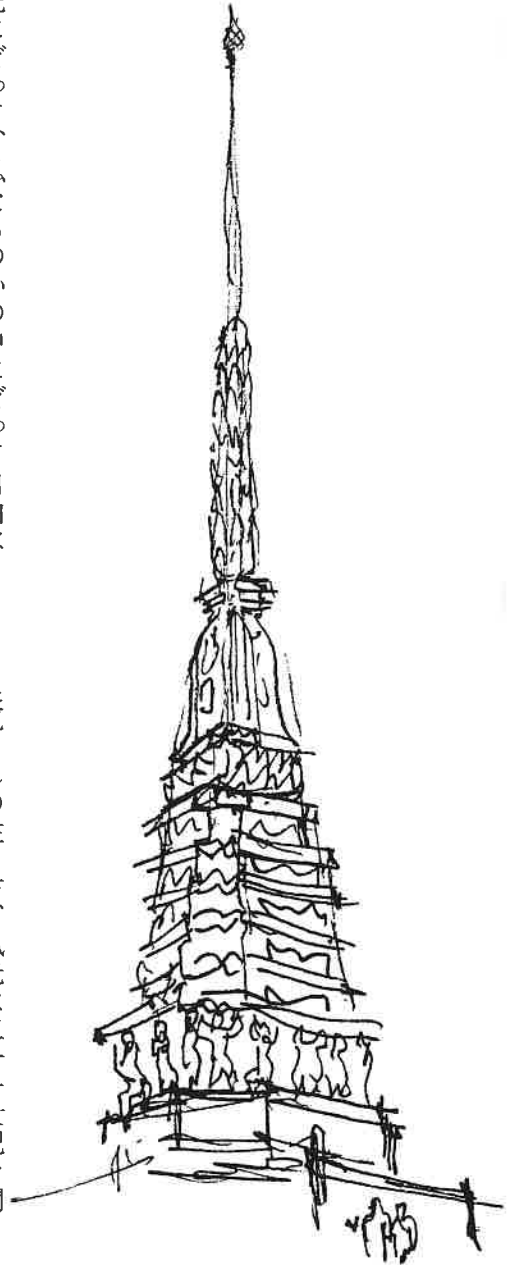
この詩の通釈を述べるならば、「大鵬が垂天から出てくる。九万里を南に行こうとする。私のどくろは翼を筆に縮める。半間の菴の中に掛けてられているが、ゆったりとしている。はたしてどちらが自由でゆったりしているか。」というようなことになろう。

たしかに、莊子逍遙篇に登場する大鵬は巨大なスケールの持ち主であり、九万里もの気が遠くなるような距離を一回はばたきするうちに飛んでしまうのである。とてつもないスケールの大きさである。だが、それは本当に自由ということなのかと良寛さんは考え、自分のどくろは翼を筆の中に縮め、半間の菴の中でもゆつたりとしていると主張している。それは全くその通りであろうと思われる。とかく我々は、莊子の大鵬を見る時、大空をわがものと飛ぶのを見る時、彼はなんて自由に大空を飛びまわっているのかと考えがちである。だが、それは大きなあやまちではないかと今は、考える。大鵬はその大きさの故に巨大な空間がなくては自由は得られないのである。しかし、良寛さんの描く鵠は筆の先にその身を縮めることもできるし、たった半間の菴の中にあっても大鵬と同様の、いやそれ以上の自由を得ることができるのである。

我々人間というものは、とかく、外へ外へと目を向けがちである。しかし、それは本当の自由を得るといふことにはならないのではないだろうか。大きいものを見ればきりが無い。だが、それら巨大なものが自由を得るためには、それ以上に巨大な空間が必要なのだということである。それとは反対に、内へ目を向けるならば、そこに存在するものはほんのわずかな空間で自由を得ることができるのである。たとえば、私たちの心の中にだって自由は存在するのである。私たちの体は本当に小さなものである。そこにほんのちっぽけなものである。だが、私たちはそこにおいて、思いをめぐらし、無限の宇宙をとびまわることでもできるではないか。九万里をひととびする大鵬以上の自由をそんなわずかな空間で感じるということができないか。決して大きいというのが、自由ということではない。

筆先にだって、私たちの心の中にだって自由はあるのである。それを自由と感ずることができるか否かはそれを感じる人次第である。

私はこの詩を読むとどうしようもない思いにかられる。それはこういった大いなる思いを私たちに語りかけてくれ、私たちの心の奥底に眠れる無限の自由をよびさますからであろう。魂を奪われる良寛さんの詩は実に多い。どれ一つにも秘められた真実がある。それらを探りあてようと努力したい。



良寛さんの生き方、風光は二十一世紀を開くにたる指標として世界の注目を集めている。良寛さんの示した道こそ二十一世紀の道である。良寛さんの風光は二十一世紀を照らすしるべとなるであろう。

良寛さんを中国人に紹介するのは私の使命のように感じている。愛心と愛語による花籠に盛られた最も美しい心のこもった詩歌の世界は分かりにくい世界である。その世界を少しでも究明できればなによりである。